中学校社会科授業改善の試み
―中学校社会科地理的分野　日本の諸地域（中国・四国地方）の授業実践から―

埼玉大学　安原　輝彦

１．はじめに

学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）の全面実施（小学校 2020 年度，中学校 2021 年度）が近づく中，「主体的，対話的で深い学び」としての学びの姿，「思考力，判断力，表現力」を通して養われる学びの力，「習得，活用，探究」といった学びを活かしての知的な活動の発展が示され，これらを授業実践の場で積極的に推進することで児童生徒たちが次の時代を生きる力を身に付けるよう学校の教育現場では実践の試みが始まっている。

が，その一方で，「社会科はやっぱり暗記科目だよね」「受験に役に立つのかな」と学習することの目的と手段を逆に考えているようなつぶやきや発言も相変わらず少なくない。このような声を子どもたちから聴くことはつらいが，教科を担う教師自身からも漏れ聞こえてくると，授業改善や授業改革の根底を支える授業観，学習観はどうなっているのだろうかと心配になってくる。

「学ぶ」ということ，あるいは「なぜ学ぶのか」ということを教師たち自身が自分の頭で考え，自分のことばで理解し，自分のことばで他者に伝えることができるのかが問われているのかもしれない。まさに，教師自身が「学ぶ」ということ，「なぜ学ぶのか」ということを問われているともいえる。

佐伯胖によれば，「勉強」では，教えたいこと，身に付けさせたいことをあらかじめ想定して，上手に学ばせて先取りする姿がよしとされるが，それに対して，自分で本当だと思うことを自分で楽しみながら探求していくことが「学び」である，として，特に学びに関わる「わかる」ということについて，「わからないところがわかること」「絶えざる問いかけを行うこと」「無関係であったもの同士が関連づいてくること」「死にいたるまでわかりつづけていくこと」の４点を述べている[1]

また，白水らによれば，大学生に４カ月から１年間の期間をおいて講義で聞いた話を思い出してもらうと教員が覚えておいてほしかった内容については約 5%の学生しか覚えていなかったという調査もある。[2]

このような中，日々授業実践に向き合う教師へのエールも込めて，私自身の授業実践をたたき台の一つとして報告し，「主体的，対話的で深い学び」としての学びの姿，「思考力，判断力，表現力」を通して養われる学びの力，「習得，活用，探究」といった学びを活かしての知的な活動の発展について，議論の輪が広がることを期待したい。

２．中学校社会科学習指導の改善充実等から

この度の学習指導要領（平成 29 年３月告示），特に中学校学習指導要領の改訂の主旨及び要点の中で，すべての教科等の目標及び内容が「知識及び技能」「思考力，判断力，表現力等」「学びに向かう力，人間性等」の三つの柱で再整理されたが，特に，学習指導の改善充実等で，「主体的・対話的で深い学び」の実現が示され，方式化された授業の方法や技術ではなく，授業改善の考え方として重視されている。[3]

ところで，「社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成」を目指して，1989 年版の学習指導要領では「新しい学力観」が示され，今回の学習指導要領改訂に至るまでにまもなく 30 年が経過しようとしている。また，この平成元年版に続いて，1998 年版（教育内容の厳選，「総合的な学習の時間」の新設）では「基礎・基本を確実に身に付けさせ，自ら学び自ら考える力などの［生きる力］の育成」を掲げた。そして，前回 2008 年版では「生きる力」の育成の充実を期して，基礎的・基本的な知識・技能の習得，　思考力・判断力・表現力等（学校教育法 30 条 2　…課題を解決するために必要な思考力，判断力，表現力そ

の他の能力…)の育成のバランス(授業時数の増，指導内容の充実，小学校外国語活動の導入）が示された。

これらの学習指導要領の変遷をたどってみると，今回の学習指導要領では，未来に向かって様々に変化する社会や世界に積極的に向き合い，他者と協働して課題を解決していくことや，様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し，情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと，複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようになることが求められていることがわかる。

また，このことを踏まえて，社会科の改訂の視点からは，授業実践においては「社会的な見方・考え方」を働かせる中で，社会科ならではの「問い」が設定され，社会的事象に関わる課題を追究したり解決したりする活動が取り入れられることによって実現することが求められている。

さらに，ここで示された「社会的な見方・考え方」は「社会的事象等をみたり考えたりする際の視点や方法であり，時間，空間，相互関係などの視点に着目して事実等に関する知識を習得し，それらを比較，関連付けなどして考察・構想し，特色や意味，理論などの概念等に関する知識を身に付けるために必要となるもの」であるとされた。

２.「主体的，対話的で深い学び」「社会的な見方・考え方」を意識して

では，社会科の授業において「主体的，対話的で深い学び」と「社会的な見方・考え方」をキーワードにして，社会科が目指す目標や個々の授業のねらいを達成するために，どのような授業展開が考えられるのか，また，その一例としての試案を提示してみたい。

生徒たちが社会的事象を題材にして，社会への興味や関心を抱き，学習内容を一人一人が主体的に学び続けようとする意欲を支える「問い」を持ち，さらに，教室あるいは教室外などの学びの場において友達や教師，地域の人々など自己とは異なった他者の考えや思いなどに触れながら新たな課題や発見，異なった視点を持つなどによって「問い」を共有したり，「問い」を再構成する。

つまり「わたしの問い」から「われらの問い」，さらに「みんなの問い」そして，もう一度「わたしの問い」へと思考の幅を広げ，質を深めるといった循環を繰り返すことで思考力，判断力，表現力を磨いていく。柴田義松は「子どもたちが自ら問い，みんなでその問いについて考え，追究するというように，授業のあり方を変えていかねばならない」[4]と述べている。これらのプロセスを繰り返すことで，習得，活用，探究という学びが深まっていくが，この時に教科の特質，ここでは社会科の「社会的な見方・考え方」を働かせることが重要になる。社会科における深い学びは，社会的事象の意義や意味，相互関係，社会的課題の把握や考察，その解決の構想から生まれるが，それを支える視点や方法としての「社会的な見方・考え方」を駆使することで学びが充実し，さらなる新たな「問い」が発見され，学び続ける態度が養われていくのである。岩田は「社会科の授業において問いが重要な意味をもつのは，それによって学習過程が決定される」[5]と指摘している。

このような「問い」をベースにした授業を構成し，充実させるためには協働的な学習が欠かせない。

森朋子は「これまで学習心理学や認知心理学，認知科学，学習科学，脳科学などの学習を扱う分野においては，他者とともに学習することによって，理解が深まることはすでに定説になっている」[6]と述べて，探究活動のみならず，教科教育でのアクティブラーニング導入を推奨している。

社会科の授業に関わらず，多くの教科では学習内容について子どもは授業前にはほとんど学習していない状況を前提に教師は授業を構成する場合が多い。ところで，この場合教師は授業のねらいである子供たちが身に付けてもらいたい学びや態度，知識，技能をどのように設定しているのだろうか。

一般的に，授業実践前には子どもたちは学習内容については未学習である。一方で，すでにこれまでの育ちの中で学習内容及び関連事項に関して，一人一人の子どもたちの既有の知識や経験は一人一人異なっており，興味関心や学習意欲，理解もそれぞれに異なっている。にもかかわらず，教師が教室の全員に向かって学習課題を提示し，様々な教材を提供するなどの工夫はするものの，教科書に書かれた内容を中心に子どもたち全体に，あるいはグループに，そして個人に質問を繰り返しながらの問答を経て授業の終末を迎え，まとめとして板書（多くは教科書に書かれた内容の整理）

を振り返りながら「わかりましたか」「わからないところはありますか」と質して，最後に「今日は〇〇について学習しました」と締めくくる。このような授業実践に対して，学習内容を学ぶのは誰であるかを問うとき，言うなれば，子どもが学習したというよりは，教師が教えるという仕事を終えた，という教師中心の授業になっているのではないだろうか。つまり，ここでは「問い」の主人公は子どもではなく，教師になってしまっている。

例えば，社会科の授業を構成する中で，「社会的な見方や考え方」を駆使し，併せて思考力，判断力，表現力を発揮しながら学び続けるのは本来児童生徒であるはずなのだが，前述のような授業実践においては教師が学びの場の主になり，子どもたちは従になってしまっている関係である。教師が予定した問いを教師の流れで展開していくために，子どもたちは自分たちで「社会的な見方や考え方」を駆使することができず，結果的に主体的に学んだり，対話的を通して他者と学び合うことができない授業になってしまう。

このことは稲垣，波多野が 30 年ほど前に指摘した「伝統的学習観」であり，「効果的に知識を身につけるためには，まず教える人がいなくてはならない。つまり，教え手がいて初めて学べるのである」[7]とする考えから今も脱していないのである。しかもこの「こうした伝統的な学習観が形成される基礎になっているのは第一に学校での学習の様相であろう」といい，小中学校などの学校をモデルにしていると指摘している。実に耳の痛い話である。現在も学校の教師たちがこの「伝統的学習観」を支えているとしたら「主体的，対話的で深い学び」の広がりを期待できないことになる。今回の学習指導要領の改訂において，いかにしてこの「伝統的学習観」から脱却するか。つまり，子どもたちを受動的で，有能でないとみなすことを前提にした学習から，子どもは能動的で有能な学び手であるとする学習観への転換が求められているのである。一定の断片的な知識を教え込もうとする授業を繰り返していては，教師が学びを管理することになり，学習者への学びの意欲を増々減退させるという落し穴に陥ってしまうばかりだろう。

学ぶのは子どもであり，教師は学びを仕掛けるファシリテーターであることへの学習観の転換にかかっている。三崎は自身の授業実践を終えての子どもたちからの感想として次のような例を示して子供たちの学び合いによる効果を指摘する。「1人で考えるより，人に聞いてやったほうが理解できると思うし，教えてあげる方も教える前より理解度が上がると思うし，何よりも楽しく勉強ができると思うからです」[8]さらに，習得，活用，探究というプロセスの実行にあたっては自分とは異なった視点，考えや思い等と出会い，議論や討論あるいは共感，共有する経験を通して協働的な活動がなければ深まりのある学びには及ばないことは多くの研究が指摘している。

３．協働的学習の試行授業から授業改善を考える

では，実際に「主体的，対話的で深い学び」「社会的な見方･考え方」を意識した授業実践を試み，試行授業から得た改善の視点を考察し，その後，改善案を提案したい。

試行授業の分野及び単元等は以下のとおりである。なお，この授業実践においては，現行学習指導要領における使用教科書の内容構成をベースにしながらも，新学習指導要領（平成２９年３月告示）を意識して指導計画及び各授業を再構成した。

(1)分野：中学校社会科地理的分野
(2)単元：「日本の諸地域（中国・四国地方）」
(3)授業：「中国・四国地方の人々の営み＜特色ある産業から＞」
(4)使用教科書：「新しい社会　地理」2015 年版（2017 年２月）東京書籍
(5)授業実践校：埼玉県秩父市立吉田中学校１年生　2018 年 10 月 11 日
(6)授業構想及び指導案

【授業構想と指導計画】

学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）によれば，日本の諸地域の学習については以下のように示されている。

「２内容　Ｃ日本の様な地域　(3) 日本の諸地域　次の①から⑤までの考察の仕方を基にして，空間的相互依存作用や地域などに着目して，主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して，以下のア及びイの事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のような知識を身に付けること。

（ア）幾つかに区分した日本のそれぞれの地域について，その地域的特色 や地域の課題を理解すること。

（イ）①から⑤までの考察の仕方で取り上げた

特色ある事象とそれに関連する他の事象やそこで生ずる課題を理解すること。
イ 次のような思考力，判断力，表現力 等を身に付けること。
（ア）日本の諸地域において，それぞれ①から⑤までで扱う中核となる事象の成立条件を，地域の広がりや地域内の結び付き，人々の対応などに着目して，他の事象やそこで生ずる 課題と有機的に関連付けて多面的・多角的に考察し，表現すること。

①自然環境を中核とした考察の仕方
②人口や都市・村落を中核とした考察の仕方
③産業を中核とした考察の仕方
④交通や通信を中核とした考察の仕方
⑤その他の事象を中核とした考察の仕方

このことを踏まえ，本単元である「中国・四国地方」の単元指導計画を以下のように整理してみた。

中国・四国地方の単元指導計画（5 時間）

時数	主な学習内容	学習活動	教材・資料
1	中国・四国地方をながめて 中国・四国地方の自然	○中国･四国地方の様々な地域を眺めてみよう(自然環境を中核とした考察) 「高知県から鳥取県を地図と映像で確かめ，中国四国地方の自然や地形を確認しよう！」	・Google Earth ・地図帳 ・各県の観光パンフレット
2	自然環境を生かした農林業，漁業	○中国・四国地方の農林水産業を調べ，特色をつかもう。 ・三つの地域の自然と農林水産業の関係を考える （自然環境を中核とした考察） （産業を中核とした考察） 「中国四国地方の自慢の農林水産物は何だろう？」	島根，鳥取県 HP 山口，広島，岡山 HP 香川，徳島，愛媛 HP 高知 HP 都道府県ランキング みかんご飯，みかんパン ジュースの出る蛇口（松山空港）
3	中国・四国地方の人々の営み 日本や世界の海運を支える瀬戸内地域の造船業	○造船業が瀬戸内地域と結びつく産業について考える。 （産業を中核とした考察） （交通や通信を中核とした考察） ・海運で働く人々の活躍 ・日本や世界の海を駆ける造船業について概観する。 ・なぜ，瀬戸内地域で造船業が発達したのだろうか・(I 造船会社から学ぼう) 「すごいぞ日本の産業・暮らしを支える造船業！」 「どうして瀬戸内地域に造船所が集中しているのだろうか？」	・DVD（海の上のプロフェッショナル 0-13 分） ・造船業の現状（国土交通省） ・石油化学コンビナートの仕組み（原材料，製造工程，製品，流通，消費） ・今治造船会社 HP ・日本造船工業会資料
4	瀬戸内地方に集まる人口 地方中枢都市 広島 過疎化する地域の増加と対策	○中国・四国地方の人口分布から 各地域の特色や課題について考える。 （人口や都市・村落を中核とした考察） ・中枢都市広島の役割 ・過疎化に直面する地域とその対策 （課題と対応策）	・中国・四国地方の人口分布 ・各県の人口推移 ・「広島市」「高知市」「〇〇町」の直近 30 年間の人口推移 ・過疎化と地域振興の例
5	交通網の変化による人口変動	○高速道路や連絡橋の開設により中国･四国地方に暮らす人々の生活はどのような影響を受けたか考える。 ・交通網の発展経過 ・人口推移 ・物流品目と物流手段	・中国・四国地方の 50 年前の地図と現在の地図 ・高速道路や連絡橋 ・住民の人口推移 ・観光客の推移

		「中国自動車道の開通や中国四国連絡橋の建設は地域をどのように変化させたか？」	・各都市から東京までの 50 年前の移動時間と現在の移動時間及び移動手段

【指導案】中国・四国地方の人々の営み

第 3/5 時　「２　中国・四国地方をながめて②　中国・四国地方の人々の営み」

〇本時のねらい

・国内外の物流を支える日本の造船業への興味関心と学習意欲を高め，日本の造船業が瀬戸内地域に集中していることの要因について考える。

・ジグソー学習を通じて，各自が分担した学習をグループで持ち寄り，多面的多角的に考察する。

過程	〇学習課題・活動　　・学習内容	◎資料例　◆指導上の留意点
導入 7分	【４人一組のグループ構成】（あらかじめ生活班では各自がＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄを確認） 〇中国四国地方の簡単な復習（ＰＷ資料） ・ビデオ視聴（日本の海運ダイジェスト版第１章）冒頭の約５分	・あらかじめ４種類のカードを生活班の中で確認しておく。 ・ビデオ視聴「日本の海運」ダイジェスト版１章　約５分
展開 30分	〇瀬戸内工業地域の特色の一つである造船業について調べてみる。 学習課題１　すごいぞ日本の産業・暮らしを支える造船業！ 「国内造船所の地域分布」で国内の造船所を確認 ・国内の造船所は瀬戸内地域と西九州地域に集中している。 Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ各５人ずつ２つの班を作る。（欠がいれば４人） 〇A1,2　B1,2　C1,2　D1,2 のそれぞれの座席に集まって，資料を参考にそれぞれの課題について学び合う。 Ａ どんな種類の船があり，船舶はどんな役割を担っているのか？ ・いろいろな船舶の種類と運搬品の特徴について。 ・日本の貿易（輸出・輸入）品目で主に船舶が運搬するモノは何か。 ・国内での船舶輸送はどんな品目を運搬しているか。 Ｂ 造船企業の特色と働く人たちの様子はどうなっているか。 ・造船企業で働く人たちは様々な仕事をしている。 ・造船企業は様々な産業や企業とのつながりがある。 ・造船には広い敷地や多くの関連会社が必要である。 Ｃ　日本と世界の造船業はどのような状況にあるか。 ・世界における造船業は日本，韓国，中国が中心。 ・韓国，中国，日本の建造量はどうなっているのか。 ・最近，建造量における日本の躍進 ・日本の竣工量ランキングでは，今治造船が１位。 Ｄ　日本国内で海運（内航船）はどんな活躍をしているのだろうか。 ・国内の農産物や工業製品の運搬の多くを担っている。 ・トラックや鉄道コンテナ輸送と連携して物流を支えている。 ・環境にやさしい努力をしている。CO_2 排出の抑制など。 〇元のグループに戻って，ワークシートの課題にしたがって，それぞれが学んだことを報告し合いながら，ワークシートにまとめる。 ・船舶の種類や，国外，国内の物流に活躍している船舶の働き。 ・日本の造船業の特色や瀬戸内地域での発展。 ・世界の造船業では韓国，中国が日本のライバル。 ・環境への取り組み。 学習課題２　どうして瀬戸内地域に造船所が集中しているのだろうか？ ・穏やかな入り江の地形が多い。 ・瀬戸内海は昔から船の航路で海運業が盛んだった。	◎日本主要造船所の分布 ジグソー調査と報告について確認する。 日本造船工業会 https://www.sajn.or.jp/pr （中高生向け壁新聞） ◎日本造船業の概要 （海の仕事.com） http://www.uminoshigoto.com/make/shipbuilding_industry_diti.html ◎造船会社等の HP（例：今治造船会社） http://www.imazo.co.jp/ ◎造船業の現状（国土交通省） ◎世界の造船業の概況 ◎造船企業別竣工量ランキング（2014 年） ◎中国地方の港湾 ・瀬戸内地域の工業生産 ・内航で運ばれる工業製品 ・瀬戸内地域の港湾の整備他 ワークシートでの振り返りと学び合い ◎日本主要造船所の分布

	・造船所は沿岸部で広い土地を必要とする。 ・第２次大戦前に戦艦や海軍の基地があり造船が盛んだった。 ・現在は石油化学コンビナートの地域があり，ともに広い敷地と港湾設備が必要であり，原材料，製造品運搬で相互に強い関係がある。	
まとめ ５分	○ビデオを視聴する （日本の海運ダイジェスト版第２章）冒頭の約５分	◎ビデオ視聴「日本の海運」ダイジェスト版２章（5 分）
家庭学習課題	○中国四国地方の９県では様々な農産物や水産物が産出されています。これらの農産物や工業製品を販売するためには消費地まで輸送しなければならない。次の産物を輸送する場合，あなたはどのように手段（トラック，鉄道，船舶，航空機）を組み合わせて輸送しますか。 下記の要因を考えながら記入してください。 要因…　燃費コスト　鮮度　輸送時間　環境負荷（CO_2） 積載量　人件費　その他 愛媛のみかんジュース（東京へ）　高知のマグロ（大阪へ） 岡山のマスカット（札幌へ）　広島の牡蠣（フランスへ） 山口の自動車（鹿児島へ）　島根の畜産肉（名古屋へ） 徳島の木材（仙台へ）　鳥取のらっきょう（福岡へ） 香川のたこ（長野へ） ○明日の朝，ワークシートを社会科係に提出してください。	教科書，地図帳，資料集，ネット検索で輸送についての資料を使って考える ◎中国四国の交通網（陸上輸送，鉄道輸送，航空機輸送，海上輸送） ◎重要港と航路 ◎空港と空路 ◎高速道 ◎本州四国連絡橋

「日本や世界の海運を支える瀬戸内地域の造船業」　ワークシート

2018 年　　月　　日

年　　組　　番／氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1　どんな種類の船があり，船舶はどんな役割を担っているのか？

2　造船企業の特色と働く人たちの様子はどうなっているか？

3　日本と世界の造船業はどのような状況にあるか？

4　国内の海運（内航船）はどんな活躍をしているのだろうか？

5　どうして瀬戸内地方に造船所が集中しているのだろうか？

6　中国四国地方の９県では様々な農産物や水産物が産出されています。これらの農産物や工業製品を販売するためには消費地まで輸送しなければならない。次の産物を輸送する場合，あなたはどのように手段（トラック，鉄道，船舶，航空機）を組み合わせて輸送しますか。下記の要因を考えながら記入してください。

要因…　燃費コスト　鮮度　輸送時間　環境負荷（ＣＯ2）　積載量　人件費　その他

産物	トラック・鉄道・船舶・航空機	重視した要因
愛媛のみかんジュース（東京へ）		
高知のマグロ（大阪へ）		
岡山のマスカット（福岡へ）		
広島の牡蠣（フランスへ		
山口の自動車（鹿児島へ		
島根の畜産肉（名古屋		
徳島の木材（仙台へ）		
鳥取のらっきょう（札幌へ）		
香川のたこ（長野へ）		

(7)授業を振り返る（考察と改善点の洗い出し）

①【授業のねらいについて】

まず第一に，学習課題を時間内に２つ設定したが，このことで本時のねらいを曖昧にしてしまい，ねらいに到達できなかった。限られた授業時間を考えれば，２つの学習課題を設定すること自体に無理があったことは明らかである。欲張った計画が結局は社会的な見方や考え方を発揮して深まりのある話し合いの時間の確保ができずに浅薄な話し合いに終始したことになった。指導案が机上の空論と化した第一の原因である。

特に，学習課題１の「すごいぞ日本の産業・暮らしを支える造船業！」の設定については，授業者が子供たちの実態として海なし県埼玉の，かつ秩父の山間部に位置する学校であることを意識するあまり，小学校の既習事項とともに，海洋についての基本的な構えを，船舶を製造する造船業を通して持ってもらおうと，船舶や造船業について「教えなければ」の意識を強く持って設定した課題になった。

実際，海の船舶の利用経験のある子どもは一人もいなかったが，それでも小学校での学習や日常生活での映像ニュースやテレビ番組など間接的には海洋についての理解はある程度あるはずであり，「教えなければ」ではなく「もっと知りたい，いろいろ学びたい」の興味関心の喚起を図る導入発問程度に止め，学習課題といった方策をとるべきではなかったと反省した。

したがって，本時のねらいの中心である学習課題は２の「どうして瀬戸内地域に造船所が集中しているのだろうか？」であったのだが，学習課題１の方でかなりの時間を使ったことが影響して，どちらかといえば興味関心が船舶の種類や物流での船舶の役割の方向に流れて行ってしまった。

また，学習課題１と２との関連についても，学習課題１での各自の学習課題一つ一つが，グループ全体で考える学習課題２との関連が図られていなかったのではないかと疑問を残す。つまり，「船舶の種類と役割」「造船企業の特色と働く人の様子」「日本と世界の造船業」「内航船の活躍」といっ

た各自の学習がどの程度学習課題２の「瀬戸内地方に集中する造船業」に関連するのか，子供たちの学習２についての話し合いの中でほとんど活かされていない状況であった。

さらに，生活班での学習と，ジグソーグループでの学習という学習の場を２つ設けてねらいとした多面的多角的な考察についても，一人一人が学習した内容を活かすことのできないグループでの学習課題であったため，結果的に深まりのある課題追究ができなかった。

②【導入について】

小学校での既習学習の復習のため「これまでも皆さんは小学校でも中国四国地方について学んできました。では，ちょっと，中国四国地方について復習してみましょう。」と概観したのだが，授業者がＰＷを示しながら行った発問に子供たちは積極的に応答して，約７分以上の時間を使い，予定の３分を大幅にオーバーしてしまった。

○子供たちの発言の主なものは以下。

・各県名　・各県の主な特色（物産，建物，観光，風景）。石油化学コンビナート施設情景や製造工程イメージ（ただし石油化学コンビナートの発展の歴史や産業の役割についての発言はなかった）　・大きな船を見たことがない　・船が瀬戸内海では渋滞するとは驚いた　・海岸で干拓地が多いことを知らなかった

・次にビデオ視聴「日本の海運」ダイジェスト版１章を視聴した。約５分の予定であったが，船舶が支える物流の影響場面（コンビニ商品の棚）に大きく反応したこともあって，７分程度まで延長した。ここまでですでに 10 分近く時間をオーバーしていた。

○子どもたちの主な発言は以下

・船の大きさが想像できない。こんなに船で資源や食料を毎日運んでいたなんて知らなかった　・船の運搬が止まるとコンビニの商品がほとんどなくなることは驚きだ　・秩父の人口よりも造船業で働いている人の方が多いのはすごい　・日本は海に囲まれた海洋国家であったことを忘れていた　・戦争や事故で海外から資源や食料が届けられなくなったら日本は大変なことになる

③【展開】展開における学習の構想と実際の実践での学習活動のギャップについて

（構　想）

学習課題　1

「国内造船所の地域分布」を提示した後で学習課題１「すごいぞ日本の暮らしを支える造船業！」についてそれぞれ以下のグループに分かれて各学習課題に取り組ませた。

A　日本の暮らしや産業を支える船舶の種類と貿易品目の運搬にはどんなものがあるか

B　造船企業の特色と働く人たちの様子はどうなっているか

C　日本と世界の造船業はどのような状況にあるか

D　国内の海運（内航船）はどんな活躍をしているのだろうか。

＊資料は「国土交通省」資料，「日本造船工業会」の中高生向け壁新聞，「海の仕事 com.」から抜粋したものなどを使用　（日本造船工業会の広報パンフレット『ship building』，内航海運キッズページ『ふれんどシップ』も参照）

(1)各グループ（A　B　C　D）４つの課題の専門担当者自身が自分が知っていることや考えをまとめる。

(2)A　B　C　D　のそれぞれのグループ内で資料を参考に自分の考えや資料から読み取った情報などを学び合う。

(3)元の生活班に戻り，各グループで学んだことを班内で学び合う。（ワークシート整理）[9]

学習課題　2

どうして瀬戸内地域に造船所が集中しているのだろうか？

「日本の造船業について，みんなで様々な面から学んできましたが，さて，資料からもわかるようにこの造船業の中心地が瀬戸内地域に集中しています。どうして日本では，瀬戸内地域に造船所が多くあるのでしょうか。これまでの造船に関する学習をヒントに考えてください。」と課題を提示して，各生活班ごとに学び合わせた。

（実践での現実）

まずは学習課題１についてだが，グループごとに配布した資料の読み取りに多くの子供たちが戸惑っていた。資料内容が専門的だったり，内容の記述が詳細で，かつ文字説明が多かったためではないかと考えられる。造船についての内容を初め

て目にする子供もいて，自身の考えや感想を持つ前に資料の内容を理解することに格闘していた。特にＡグループ「日本の暮らしや産業を支える船舶の種類と貿易品目の運搬にはどんなものがあるか」とＢ「造船企業の特色と働く人たちの様子はどうなっているか」の資料の理解には子どもたちが戸惑う様子が多々見られた。これは授業者があらかじめ子供の目線に立って資料選択や資料改変を怠ったためといえる。確かに，各団体が作成した資料自体はよくまとめられ，写真やグラフ，働く人々のインタビューなど様々な内容がそろっていたが，中学１年生の段階にある子どもたちには専門的な言葉や日常生活で目にすることのない造船業や船舶のことであるから理解するにはかなりな時間を要する資料である。

次に，学習課題２の取り組みでは，ここで地理的な見方や考え方を駆使した話し合いをねらいとしたのだが，その前に学習した学習課題１とのつながりや関係を見出すことがかなり難しく，学習課題１と学習課題２は別々の質問であるととらえた子供が多かった。そのために，学習課題１で話し合って考えた内容や調べた事項が学習課題２で活かすことができず，新たな学習課題として取り組み始めたので，時間がかかってしまい，十分な話し合いも進まないままに授業時間がこの活動の途中で終了を迎えてしまった。

子どもたちの発言は以下。

〇学習課題１に関して

・船舶の種類の多さに驚いた　・貿易には船舶の輸送が欠かせない　・資源や食糧はほとんどが輸入，自動車や工業製品はほとんどが輸出，日本は貿易立国だ　・世界の船が日本，中国，韓国の３国でほとんど作られているのを知らなかった　・中国の造船業の進出がすごい　・造船は男の人たちの職場のイメージがあるが，女性も結構働いている　・どうして野球場が入るような巨大な船を造る必要があるのかが分かった　・造船業といってもいろんな会社が分業して多くの製品を作っている　・省エネやＣＯ２排出の工夫など，船も環境を考えて作られている　・船で運ぶイメージは海外だと思っていたが，国内でも物流に活躍していたことを知った　・トラック輸送と船の輸送の使い分けがなんとなく分かってきた

〇学習課題２について

・船を造った後，すぐに船出できるから　・瀬戸内海は比較的静かな海で航海しやすかったから　・第２次大戦などの戦争で軍の港や基地もあったから・昔から漁船などの船づくりが盛んだったから　・関西地方や九州地方を結ぶ地域で物資の運搬が多かったから　・島が多く，風景が美しかったので船の観光ができるから　・日本海と太平洋に挟まれて，穏やかな気候だったから

以後の学習内容については約１０分の延長により実践した。（あらかじめ実践授業が６限目であり，出張授業であるためできるだけ用意した授業内容での 10 分程度の延長は可とされていた事情に甘えてしまった）

【本時の終末】　ビデオ視聴（5 分）日本の海運ダイジェスト版の第2章の内航海運約 5 分

【家庭学習課題】　次のような指示を出して，ワークシートの記入について確認した。

なお，このワークシートのねらいは，中国四国地方での造船業，並びに流通（物流）の担い手である船舶について学んだことを活かして，中国四国地方の代表的な工業製品や農林水産物の流通について考えさせることである。しかしながら，家庭学習に位置付けたものの，一人一人が調べて考えるには難しい課題であったようである。回収後の記入では手段の組み合わせも少なく，単純に１種類の記述が目立った。したがって，手段を選択した要因についても１種類，または２種類しかなく，思考が浅薄になってしまったようである。やはり，話合わせることでの活動が無ければ，課題のねらいにはなかなか到達できないようだ。家庭学習に大きな課題を残したことになる。

中国四国地方の９県では様々な農産物や水産物が産出されています。これらの農産物や工業製品を販売するためには消費地まで輸送しなければならない。次の産物を輸送する場合，あなたはどのように手段（トラック，鉄道，船舶，航空機）を組み合わせて輸送しますか。下記の要因を考えながらワークシートに記入してください。

要因…燃費コスト　鮮度　輸送時間　環境負荷（ＣO2）　積載量　人件費　その他

愛媛のみかんジュース（東京へ）
高知のマグロ（大阪へ）
岡山のマスカット（札幌へ）
広島の牡蠣（フランスへ）
山口の自動車（鹿児島へ）
島根の畜産肉（名古屋へ）
徳島の木材（仙台へ）
鳥取のらっきょう（福岡へ）
香川のたこ（長野へ）

以上，延長の 10 分間は「ビデオ視聴」と「家庭学習課題」の説明に終始して授業を終了した。

４．授業実践の振り返りを踏まえた授業構想

これまでの授業実践の考察と洗い出した課題点，改善点を踏まえて，改めて中国四国地方の学習の修正授業案を提案する。

改善指導案 中国・四国地方の人々の営み
第 3/5 時:「２　中国･四国地方をながめて②　中国・四国地方の人々の営み」

〇本時のねらい

・国内外の物流を支える日本の造船業への興味関心と学習意欲を高め，日本の造船業が瀬戸内地域に集中していることの要因について考えることで瀬戸内地域の特色を考察する。
・ジグソー学習を通じて，各自が分担した学習をグループで持ち寄り，多面的多角的に考察する態度を養う。

過程	〇学習課題・活動　　・学習内容	◎資料例　◆指導上の留意点
導入 7分	【４人一組のグループ構成】(あらかじめ生活班では各自がＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄを確認) 〇中国四国地方の簡単な紹介（ＰＷ資料） ・ビデオ視聴（日本の海運ダイジェスト版第１章）冒頭の約５分	・あらかじめ４種類のカードを生活班の中で確認しておく。 ・ビデオ視聴「日本の海運」ダイジェスト版１章　約５分
展開 30分	〇瀬戸内工業地域の特色の一つである造船業について調べてみる。 学習課題　どうして瀬戸内地域に造船所が集中しているのだろうか？ 「国内造船所の地域分布」で国内の造船所を確認 ・国内の造船所は瀬戸内地域と西九州地域に集中している。 A･B･C･D各５人ずつ２つの班を作る。(欠がいれば４人) エキスパートになろう！　エキスパートごとに考えよう！ 〇A1,2　B1,2C1,2　D1,2 のそれぞれの座席に集まって，資料を参考にそれぞれの課題について学び合う。 Ａ：**そもそも日本の造船業はどのような状況にあるのだろうか？** ・日本のライバル国は　　・造船業の雇用の状況は ・陸送，空送よりも海運の有利な点は Ｂ：**瀬戸内地域に造船所が集中する歴史的要因（各時代の船，船運，航路などを調べると…）はあるのか？** ・古代～江戸時代　・明治時代～第２次大戦　・第２次大戦後～現在 Ｃ：瀬戸内地域に造船所が集中する地理的要因（地形や自然，地域の結び付，地域産業などを調べると…）はあるのか？ ・中国四国地方の自然・地形の特色　・人口分布や地域　・交通網は Ｄ：**中国・四国地方の農林水産業や工業製品と造船との関係はあるのだろうか？** ・中国・四国から全国，世界的は出荷する農林水産物は ・石油化学コンビナートとの関係は 各エキスパートから戻って，課題について考えよう！ 〇元のグループに戻って，ワークシートの課題にしたがって，それぞれが学んだ	◎日本主要造船所の分布 ジグソー調査と報告について確認する。 日本造船工業会 https://www.sajn.or.jp/pr（中高生向け壁新聞） ◎日本造船業の概要（海の仕事.com） http://www.uminoshigoto.com/make/shipbuilding_industry_diti.html ◎造船会社等の HP（例：今治造船会社）http://www.imazo.co.jp/ ◎造船業の現状（国土交通省） ◎世界の造船業の概況 ◎造船企業別竣工量ランキング（2014 年 ◎中国地方の港湾 ・瀬戸内地域の工業生産 ・内航で運ばれる工業製品 ・瀬戸内地域の港湾の整備他 ワークシートでの振り返りと学び合い

	ことを報告し合いながら，ワークシートにまとめる。 （例） ・沿岸部に入り江が多く，浅い海は干拓しやすく広い地形が多い。 ・内海であるために，波は穏やかで潮流を利用した航行（地理的な背景） ・昔から海運業が発達。いくつもの航路として栄えた（歴史的背景） 古代　平安　鎌倉　室町　江戸　　各時代で活躍した海運は？ 大宰府と奈良・京都　遣唐使船，勘合貿易航路，朝鮮使　廻船航路 （明治時代以降，海軍の造船，基地として発展してきた。現在は？） ・第２次大戦後，石油化学コンビナートが発展（産業・経済的背景） 原材料の運搬　製品の搬出　　→　大量・重工品の国内外への運搬	◎日本主要造船所の分布
纏め ５分	○ビデオを視聴する （日本の海運ダイジェスト版第２章）冒頭の約５分	◎ビデオ視聴「日本の海運」ダイジェスト版２章（５分）
家庭学習課題	○中国四国地方の9県では様々な農産物や水産物が産出されています。これらの農産物や工業製品を販売するためには消費地まで輸送しなければならない。通常輸送手段(トラック，鉄道，船舶，航空機)を組み合わせて輸送しますが，あなたが最も重視する要因を1つ選択し，そのための輸送手段を1つ記入してください。 要因…　燃費コスト　　鮮度　　輸送時間　　環境負荷（ＣＯ2） 積載量　　人件費　　その他 愛媛のみかんジュース（東京へ）　　高知のマグロ（大阪へ） 岡山のマスカット（札幌へ）　　広島の牡蠣（フランスへ） 山口の自動車（鹿児島へ）　　島根の畜産肉（名古屋へ） 徳島の木材（仙台へ）　　鳥取のらっきょう（福岡へ） 香川のたこ（長野へ） **○明日の朝，ワークシートを社会科係に提出してください。**	教科書，地図帳，資料集，ネット検索で輸送についての資料を使って考える ◎中国四国の交通網（陸上輸送，鉄道輸送，航空機輸送，海上輸送） ◎重要港と航路 ◎空港と空路 ◎高速道 ◎本州四国連絡橋

「日本や世界の海運を支える瀬戸内地域の造船業」　ワークシート

2018年　　月　　日

年　　組　　番／氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1　そもそも日本の造船業はどのような状況にあるのだろうか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

2　瀬戸内地域に造船所が集中する歴史的要因（各時代の船，船運，航路などを調べると…）はあるのか？

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

3　瀬戸内地域に造船所が集中する地理的要因（地形や自然，地域の結び付，地域産業などを調べると…）はあるのか？

4　中国・四国地方の農林水産業や工業製品と造船の関係はあるのだろうか？

5　学習課題　どうして瀬戸内地方に造船所が集中しているのだろうか？

6　中国四国地方の9県では様々な農産物や水産物が産出されています。これらの農産物や工業製品を販売するためには消費地まで輸送しなければならない。次の産物を輸送する場合，通常輸送手段(トラック，鉄道，船舶，航空機)を組み合わせて輸送しますが，あなたが最も重視する要因を1つ選択し，そのための輸送手段を1つ記入してください。

要因…燃費コスト　鮮度　輸送時間・距離　環境負荷（ＣＯ2）　積載量　人件費　その他

産物	重視した要因	トラック　・鉄道　・船舶　・航空機
愛媛のみかん（東京へ）		
高知のマグロ（大阪へ）		
岡山のマスカット（福岡へ）		
広島の牡蠣（フランスへ）		
山口の自動車（鹿児島へ）		
島根の畜産肉（名古屋へ）		
徳島の木材（仙台へ）		
鳥取のらっきょう（札幌へ）		
香川のたこ（長野へ）		

5．おわりに

本研究では「主体的，対話的で深い学び」としての学びの姿，「思考力，判断力，表現力」を通して養われる学びの力，「習得，活用，探究」といった学びを活かしての知的な活動を授業実践の場で積極的に推進することを目指して，中学校社会科地理的分野で行った授業実践の結果から課題と改善点を洗い出し，改めて同単元同時間の授業を構想し提案した。

したがって，改善提案の授業はまだ実践していない。その意味ではまだ机上にある指導案である。今後，機会があればぜひ実践し，再び改善の改善を行っていきたいと考えている。

思うに授業実践は，常に提案であり，仮説であると考える。目の前の子どもたちの実態に応じて，学習内容や教材をどう構成し，学習課題を練り上げ，学習者である子どもたちが見方考え方を発揮して，追究し学び続けるようにファシリテートしていくか。授業はまさに創造的な営みであり，創造には常に提案し，仮説を検証していくプロセス

が不可欠である。授業実践者にこそ「主体的，対話的で深い学び」を追究していくことが求められていると言えるのではないか。

【註】

[1] 佐伯胖『学びの構造』東洋館出版，1975

[2] 白水始・三宅なおみ・高橋信之介「ビデオシステムによる講義内容の協調的な振り返り活動を支援する」日本認知科学会第24回発表論文集，2007

[3] 2017 年 3 月告示の中学校学習指導要領の改訂の目玉となる「主体的，対話的で，深い学び」が出されるに至った道筋を，平成元年版以降の 30 年間の中学校学習指導要領における改訂のキーワードから拾ってみたが，すでに 30 年以上も前から，子どもたちの主体的な学び，つまり，学びの主体は教師でなく，子どもたちであることが提示されてきたことがわかる。「適切な課題を設けて行う学習」「生活科」そして「総合的な学習の時間」など，子どもたちが主体的に学習する方策も多々登場してきた。これは社会科だけの課題ではなく，おそらく全教科，領域での課題である。しかしながら，一方で，高校，大学入試，最近では中学校入試という進級や進学の課題と相まって，家庭や社会が義務教育学校に求める短期的なニーズの学力観，学習観の影響もあって，学習指導要領が目指す，子どもたちが学びの主人公として学ぶという学校教育で育成するべき学び本来の姿になかなか近づけない状況に陥っていたことも否めない。このことに関して，市川伸一は 1980 年前後から「知識偏重」「知識注入」「偏差値教育」と呼ばれるような教育からの転換が政策面でも現れるようになり，1977 年改訂の学習指導要領では「ゆとりの時間」が設けられ，やがて，「新しい学力観」というコンセプトが登場する。つまり獲得した知識の量を「旧学力」とすれば，自ら主体的に学ぶための意欲やスキル実践的な問題解決能力を「新学力」とするのである。（「カリキュラム・イノベーション」東京大学教育学部カリキュラムイノベーション研究会　東京大学出版会，2015）

　同様に佐藤学は子どもにとって意味の感じられる「学び」への転換を図ることを急務としている。（『学びから逃走する子どもたち』岩波書店，2000）

　2020 年度から大学入試の本格的な改革が推進されることからも，これからは，これまでの 30 年以上にわたって叫ばれてきた主体的な学びへの希求は高まっていくと考えられる。すでに，全国の公立高校の入試問題に置いても一問一答形式の問題に変わって記述や思考過程，意見など思考力，判断力，表現力が問われる問題も増加傾向にある。

[4] 柴田義松「学び方はどのようにして身につくか」『指導と評価』９月号，図書文化，1999，p.9

[5] 岩田一彦『小学校社会科の授業分析』東京書籍 1993，p.29

[6] 森　朋子「学びが育つ教授法」田中達也編『教育の方法と技術―学びを育てる教室の心理学―』ナカニシヤ出版，2017，p.44

[7] 稲垣佳代子・波多野誼余夫『人はいかに学ぶか』」中公新書，1989，p.18

[8] 三崎　隆『学び合い入門』大学教育出版，2010，p.15

[9] 藤島俊幸はワークシートの三つの機能として，次の３つを示している。①あらかじめ資料等を示すため，無駄のない学習活動ができる。（効率性）②授業構成を書式に反映してさせているため，学習を支援しやすい。（支援性）③見とるポイントを焦点化できるため，評価しやすい。（評価性）と述べている。（全国社会科教育学会編『新社会科授業づくりハンドブック　中学校編』）明治図書，2015，pp.137-139）この指摘を踏まえて今回の授業実践を振り返ってみると，これら３つの機能をランダムに配置した形になってしまい，限られた時間内でじっくりと学習を行うには無理があったことがワークシートからも伺える。